



TITLE:

[第3セッション] 報告1: 2011年洪水とタイ政府

AUTHOR(S):

玉田, 芳史

CITATION:

玉田, 芳史. [第3セッション] 報告1: 2011年洪水とタイ政府. CIAS discussion paper No.31 : <東南アジア学会関西例会ワークショップ報告書>洪水が映すタイ社会 --災害対応から考える社会のかたち 2013, 31: 42-44

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228580>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

第3セッション

報告1

2011年洪水とタイ政治

玉田 芳史

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

タイの2011年の洪水についてまず大事なのは、みなさんの関心がいったいどこにあるのかを確認しておくことでしょう。ここにご出席のみなさんは研究者の方がおそらく多く、研究者としての関心をおもちかと思えます。一般的に共有されているのは、なぜ洪水が起ったのかという単純明快な疑問です。それは今日午前中に星川圭介さんが、かなりくわしく専門的な立場でご説明をされました。ようするに「雨がぎょうさん降ったからや」というわけです。降った雨をうまく管理できなかったのはなぜかという疑問が次に出てきます。ダムの水の管理が悪かった、手落ちがあったのではないかというような疑問が、そこに関連して出てまいります。

もう一つは、「また起こりますか」ということが、研究者にとってはさほどではないのかもしれませんが、すくなくともビジネスをしている人にとっては最大の関心事でしょう。「まあ、昨年のはしょうがない。また起こるのか」というのが、おそらく大きな関心事ではないでしょうか。

もう一点は、今日ずっと聞いていて「たしかにそうだな」と思ったことです。若干補足させていただきますと、洪水というものは、災いなのか、恵みなのかということです。あとで水上祐二さんの報告で多少触れられるかと思いますが、歴史的に言うとも洪水は恵みであって害ではない。タイは水と共存してきた社会であ

るということが議論の出発点になると思います。

しかし、その水を邪魔者だとみなす人びと、あるいは産業や社会が順番に出てきたので、厄介者とみなす人が増えてきた。地域的に言えばバンコクです。2011年に関して言えば、間違いなく工業団地が筆頭です。とりわけ日本の経済界が「とんでもない話だ」とみなすごく怒っているわけです。しかし、かつてはそんな工業団地は存在しませんでした。岩城さんが紹介されたように水と共存している社会でしたから、もともとは洪水は問題ではなかった。それが問題だと受けとめられるようになってきたということだと思います。

もう一点、みなさんのなかにもそういう方がおられるかと思いますが、日本のメディアが電話をしてきて「人災ですか」と何回も何回も訊ねました。「人災です」という答えがほしいので、実にしつこい。「違う」と答えても、「絶対にありませんか」と聞き直すので、「いや、多少はそういう面もある」と答えようものなら、「ああ、やっぱり人災ですね」と喜んでそれを報道する。人災ということは、全部政治家が悪いのではないかという話です。そういうくだらない関心をもっている方もおられます。

私自身は、そもそも政治の研究が専門ですので政治に興味があるのですが、じつは昨日、生まれて初めて『アステイオン』という雑誌を読みました。2012年5月発行の最新号をある方が送ってくださったので、たまたま読んだのです。そこでは大阪大学の前の学長である鷺田清一先生が「専門家はいかん」という趣旨のエッセイを書いておられました。自分で言えば「私はタイの専門家です。私は政治の専門家です。したがってタイの政治以外はわかりません」という専門主義はだめだということです。「そうやなあ」と反省させられました。ですから今日は政治のことだけに重点を置いてもいけないと思ひまして、広く雑駁に、さらりと流すかたちでお話しさせていただこうと考えています。

■ チャオプラヤ川水系では 洪水が毎年起こることは当然

星川さんが最初に紹介されたように、チャオプラヤの水系は資料4-1のようになっています。ダムがあるのはピン川とナーン川です。この二つだけはダムがあるのですが、残りはダムがありません。したがって、ワーン川とか、とくにヨム川は降ったら降っただけどんどん溢れることになります。

なおかつ、タイの河川の流域は日本でいうと河川数と同じです。堤防は基本的に存在しません。都市部で



護岸工事をしているところがありますが、川沿いの地域は堤防の上や堤防の外にあるわけではなく、河川敷です。水かさが増えれば溢れるのはあたりまえです。昔も今も変わりません。大事なのは、堤防はないに等しいということです。

したがって、たとえばスコタイという町がヨム川の流域にありますが、毎年洪水があります。洪水になるのはあたりまえ、水が溢れてあたりまえということです。それはナーン川もそうです。河川の水が流域に溢れるのはあたりまえというところをまずご確認いただきたいと思います。

■ プミボン・ダムとシリキット・ダムの流量管理に問題はなかったのか

ダムの管理に関しては、星川さんが紹介されたこととかなり重なります。そもそもダムの貯水能力がどれだけあって、2011年は年間でどれだけ水が入って、年間どれだけ出ていったかという問題です。

プミボン・ダムとシリキット・ダムのどちらにも2011年はとてもたくさん入っているのですが、プミボン・ダムに関して言うと、もしゼロで出発していれば放流せず全部ためることが可能でした。しかし、2010年の大晦日に62%の貯水率、その後さらに下がって雨季を迎えていますので、途中で満杯になってしまうわけです。

シリキット・ダムも同じことです。78%から少し下がっていった、5月ごろから急に増えて、最終的には

どちらも満水状態になってしまいました。現在はほぼ50パーセントの貯水率ですが、たくさん入った最後の最後で大量に流入しているの、下流に垂れ流したということになるわけです。

この部分のダム管理にミスがなかったかどうかは争点の一つになっています。星川さんは「これまでの規則や慣行に照らし合わせればミスとは言えないだろう」という説明をしておられました。タイ国内では、プミボン・ダムの管理はまずかったと言う人が多いです。シリキット・ダムは早々に放水量を増やしているのでそれ以上放水できなかったのですが、プミボン・ダムはもっと早く放水することが可能だったはず。ところが、けっこう遅くまで放水を増やさなかったの、最後の最後にドッと溢れて水塊がバンコクに押し寄せたことになります。

■ 工業団地における日本企業の被害をどのように捉えるか

もう一つ、日本にとって大問題なのは、七つの工業団地が沈んだことです。アユタヤから下流のバンコクまでのチャオプラヤに近いところに立地する何か所かの工業団地には、日本の企業がたくさんあります。たとえばホンダの工場があるアユタヤのローチャナ工業団地には、下請け産業も全部集まっています。アユタヤの別の工業団地にはキャノン、パトゥムターニーの工業団地には東芝、富士通、NEC、セイコーといった日本を代表する企業の工場があり、下請け企業の工場も集中しているので、莫大な被害が出ました。

ただし、この点に関して言いますと、そんな場所に工場を造った人も責任を免れないと思います。たとえばチャオプラヤ川から遠いところにも工業団地があります。トヨタの主力工場はもっと東のほうにありますので、直接の被害はまったく受けていません。かたや、たとえばホンダはもともと水がとてつまずいローチャナの工業団地に工場を造りました。洪水の危険性が高く、浸かってしまうと水深が2、3mになるのはあたりまえの地域です。現在コンクリートの堤防を造っているようですが、河川の水位が再び上昇して溢れ出せば盤石ではないだろうと、素人ながらに考えています。また洪水になったらたぶん浸かってしまうでしょう。

■ 水の管理責任者である農業大臣はなぜ更迭されないのか

水の管理に関して言いますと、星川さんの説明にもありましたように、水の管理の責任者は農業大臣で

す。現在の農業大臣は元灌漑局長で、なおかつ2011年の政権交代に関係なく一貫して農業大臣をやっています。つまり彼は水のプロであり、なおかつ権限をずっと握っているわけです。その彼が事情を熟知しているにもかかわらず、深刻な洪水被害を回避できなかった。まったく責任がないということはたぶんありえず、ミスをしている側面がおそらくある。

では、その大臣がなぜ更迭されないのかということに、タイ研究者は興味がいく。「こんな失敗をしたら、クビだろう」と思われ、与党内部にも「クビを切れ」という声がありました。しかし、切られない。首相よりも有力な勢力とのコネが太いので、クビが飛ばないということでしょう。

■ 外は水浸しでもバンコクだけは守る バンコク都庁の姿勢

タイでは、国政レベルではタックシン派のプアタイ党が政権を握り、バンコクは都知事も都議会も都の区議会もすべて野党の民主党が握っております。したがって、与党・野党が中央政府对バンコク政府で対立するかたちになっています。

星川さんのご説明にありましたように、輪中を造って守っているのは、やや乱暴に言うとバンコク以外にはありません。バンコクだけが輪中化しているのです。そこにダムを造ったような状況になって、内側は守るけれども外は水浸しで水がひかないということになります。それがわかりきっているにもかかわらず、バンコク都庁は上流から押し寄せた水をバンコク市内に入れようとしませんでした。

政府与党や首相も、バンコク市内に強引に水を流すことはしませんでした。したがってバンコクの北側、町の北側、輪中堤防がある北側はずっと水に浸かったままの状況になって、なかなかひかずに真っ黒な水がたまることになりました。負担を押しつけられた人たちは不満を持ちました。

たとえば2012年4月、バンコクのすぐ北側、今回水害でひどい浸水被害を受けたパトゥムターニー県で下院議員の補欠選挙があつて、与党は負けました。与党が負けた理由は洪水のせいだとタイでは説明されています。洪水は与党に逆風というのは、まことしやかな説明です。しかしたぶんそれは正しくありません。タックシン全盛時代から一貫して、タックシン派与党は政権選択選挙になる総選挙では強いものの、補欠選挙では弱いからです。

■ 王室の存在があるからこそその バンコク至上主義

やはりこの国は王室が中心だと言えます。バンコクだけをなにがなんでも守るのはなぜでしょうか。バンコクはお金持ちが多く、経済的に大事なものがたくさんあるからだという説明が従来されてきました。しかし2011年の洪水のときには、全世界に部品を供給する重要な生産拠点多くある上流の工業団地のほうが経済価値ははるかに高いにもかかわらず、そこを全部水浸しにしてバンコクを守ってどうするのだと、一部の知識人が指摘しました。それでも、バンコク至上主義でした。それはバンコクのオーナーがだれかを考えれば、察しがつくと思います。それは、岩城さんがよくご存知のとおり、中心部の土地はだれのものかということです。その経済的価値を維持するためには当然守らなくてははいけないわけであります。

洪水の被害のあと、政権は「お前らのへまだ」と言われて、メディアや野党から叩かれました。叩かれたときに、首相がどう対応したかと言えば、委員会を作りました。王党派に受けのよい人を中心に据える委員会を設置して、その人に大きな役割を担わせました。つまり「これからは洪水対策は王様のお考えどおりに進めていきます」という意思表示をすることによって批判を封じこめようとしたのです。

■ 王室への配慮から スマトラ沖地震の津波警報を流せなかったタイ

今日は災害が一つのトピックですので、関連する余談として最後に一言申しあげます。2012年4月にスマトラ沖で大きな地震がありました。私はタイにはおりませんでしたが、報道されているところによると、テレビでは津波への警戒を呼びかける速報が流れなかった。なぜか。その日は特別番組をしていた。その特別番組というのは、6世王の王女の葬式の様子を延々と中継していたわけです。葬式は1日では終わりません。身分が高いほど長く続き、何日も流している。すべての局が特番をうっていて、中断したり、テロップを入れたりすると不敬罪だと叩かれる可能性があるので流せなかった。それに対しては、王党派の側から「流してよい」という指示を出していたと後から言われています。しかし、実際は流れていないので、中継を止めたらまずいということで、たぶん怖くてだれも速報を流せなかったのでしょう。

こういう国なので、洪水対策も王室と無関係には進まないということです。